

大地や自然とともに生きてきた者たちは、大地や自然の力の偉大さも、その怖さも知っている。限りない恵みを与え、またときに大きな災禍をもたらすもの、それが自然である。そして自然の恵みとともに暮らし、働き、その一方で自然の災禍が起きないように知恵と技を働かせ、それでも災禍に遭遇したときにはその現実を受け入れながら自分たちの生きる世界を再建していく、そうやって暮らしてきたのが日本の農民であり、漁民だった。

私の友人でもある一人の漁師は、今回の災害で大きな被害を受けた。家族も失った。しかし彼は、それでも海を信じて生きるというメッセージを発している。津波も海にとっては災害ではないのだ。海という巨大な自然の世界の一つの変動に過ぎない。そんな自然の営みに寄り添って生きてきたのだから、これからもそうする、と。どんなに大きな災害にあっても、自然とともに生きてきた人間のこれからは、ここにしかない。

ところが今回は原発の事故がここに加わった。私たちが築いてきた文明自身が禍の元になったのである。それは途方もなく重いものを私たちの心のなかに生みだした。これからどれほどの期間、私たちは放射線という問題と付き合いながら生きていかなければならないのか。まだ最悪の事態がおこる可能性さえ残っている。「風評被害」といういい方さえ、この問題では適切ではないのかもしれない。なぜなら放射線による健康被害は何十年か後に顕在化する可能性があって、個人差も大きいから、微量の放射線摂取であってもそれがどのような結果をもたらすかについては誰も明確には答えられないからである。つまり結果を予測して、あらかじめ手を打つことができないという、いったん混乱すると人間には制御できないものが放射線であり、原発という放射性同位元素を利用したシステムである。

この現実には、過去の災害と同じような対応では不十分なことを私たちに教えている。どんなに厳しくても、自然の災禍に対しては乗り越えていこう。都市の人たちもそれを応援するだろう。だが原発事故の現実を乗り越えるとは何なのか。それがわからないままに、私たちは明日の歩みを開始しなければならない。このつらさを支えるものは、それでも自然との絆を大事にし続けようという思いと支え合う社会の一員でいようとする人々の行動なのだということを、私たちが手放さないで生き続けることにしかない。